
思い出 <木>

七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出 > 木く

【Nコード】

N2541B

【作者名】

七瀬

【あらすじ】

国が栄え、人が増えると共に切られてしまう、一本の木と無数の人の思い出。

(前書き)

木の思い出。

HP上に載せたものを改作。

人も国も、美しく在りたいと願います。

昔、西の大陸の片隅に、小さな国がありました。その国の真ん中、人の集まる広場の中に、一本の木が立っていました。

その国ができる前から、ここに立っていました。高くそびえ立つ姿は、国中を見回しているように見えます。

大昔の旅人が植えていったとの言い伝えが今も残っているだけで、この木の事は王様にも分かりませんでした。

夏は枝をいっぱいに広げて日差しを遮り、冬はその葉で人々を冷たく吹く風の寒さから守りました。

秋に生る実はさわやかな味がして、通りかかる人の喉の渴きを癒しました。

王様はこの木を愛していましたし、人々の生活にも、この木は深く関わっていました。

子供たちはその大きな木に、競って登りました。

国のほとんどを見渡す事ができる数少ない場所だったし、一番上まで登ることができた者だけが、仲間から一人前と認められるからでした。

お父さん、お母さんはそんな子供たちを心配しましたが、力強く伸びた枝に守られていたので、怪我をする子供はいませんでした。

異国の行商人は木と国とを称え、王様の自慢の種にもなるのでした。

時は流れて、この国にも、人がたくさん移り住んでくるようになり
ました。

町を広げて、人がたくさん住めるようにするためには、古い家を壊
さなければいけません。

王様は、泣く泣く古い家々を壊す事にしました。その時の木は、悲
しそうに見えました。

さらに人が増えてくると、中にはこの大きな木を疎ましく思う人も
出てきました。住む家が無く、橋の下や路地で寝泊りする人たちで
した

「自分たちは住む家も無いのに、何故木なんかが植えられているん
だ」と。

王様は悩みました。人が増えるのはいい事です。しかし、王様もこ
の木に登って育ったのです。愛着があつて当然でした。

王様が国民と木とを天秤にかけた時、取るべき道は一つしかありま
せんでした。

彼は王様なのですから、木より国民を守らなければならないのは、
誰にとつても明らかだったのです。

とうとうこの木が伐られる事が決まった時、王様や、木のことをよ
く知る人たちは泣きました。

手を尽くしても、考え抜いても、どうにもならなかったのです。

しかし、その時の木はなぜか、悲しそうな顔をしていませんでした。
自分の役目が終わったことを、悟っていたのかもしれない。

いよいよ木が伐られる日。

この木に思い出を持つ人たちが集まりました。

切り倒された木を、めいめいが持ち帰る事にしましたのです。

根元の太い所を貰った人は、テーブルをつくりました。

真ん中を貰った人は、椅子を作りました。

細い枝は冬に備える薪になり、葉も暖をとるために燃やされました。皮を剥がして染料にして、温かい服を作った人もいました。

実を持って帰って、ジャムを作る人もいました。

王様は根を掘り起こさせ、お城に飾る事にしました。

旅人は、最後に残った欠片を削って楽器にし、ほうぼうの国で吹き鳴らしました。

しばらく後、皆が自分の作ったものを持ち寄り、見せ合いました。

それは、この国を見守ってくれた木のことを、忘れないためだったのかもしれない。

もう泣く人はいませんでした。皆、自分にできる精一杯のことをしたのですから。

結局、木を守る事はできなかったけれど。

作った物も、いつかは朽ちてしまうけれど。

それでも、木と共に在った幸せな時間は、誰の胸にも、確かに残っているのですから。

(後書き)

1500字以内の短編、第一作。

シリーズ化を目論んでいます。

ある程度までは推敲してませんが、力量不足バレバレ。
幼い頃の経験が生きてる、半ば実話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2541b/>

思い出 <木>

2010年10月9日07時22分発行